

松下幸之助に学ぶ!!

『繁栄への道』

第三回

文・全国PHP友の会

会友 梶浦 洋一

(徳島PHP友の会顧問)

(H/PPHAG&

『菜根譚の会』世話人)

先日の参院選挙は、18歳以上の人々が折角、有権者になれたのに、低い投票率であった。選挙結果は、与党（自民党・公明党）が勝利し、結局、憲法改正の発議可能

な議席数3分の2を衆参両院で確保し得た。経済面では、デフレからの脱却を目指す『アベノミクス』の成果はいまだ乏しい。加えて英国のEU離脱問題



が惹起されたことによる経済的不安定？化の影響も懸念されている。さらに、海外ではフランスでのトラック暴走テロ事件やトルコでの軍によるクーデター未遂事件の発生など、慌ただしい。わが国も内政外交ともに多事多端である。安倍内閣では景気浮揚を図るための活動財源確保で28兆円超規模の措置をするために、国債の発行も辞さない姿勢？で、財務省や日銀・財界にも異例の協力要請を出した。内閣改造も図り、臨時国会の召集に臨むようである。

また、懸案の多い東京都知事選挙では数多の候補者

が乱立して鎬を削った。事ここに至っては国政、都政ともに腰を据えて、行政の充実を図りつつ政治の改革を推し進めねばなるまい。党利党略に現を抜かしている時ではない。さて、本題に入ろう。

『平和を求めて…』

先月号まで『どうすれば幸せに生きられるのか』を論じ合わせた青木・佐藤両氏の結論は、
【原理原則に従い、天から与えられた天分を存分に発揮して、自分も周りからも認められる幸せを手にする】
ことである、としている。
そして次は、
『どうすれば平和に生きられるのか』を課題として話を進めている。
平和の原点は、一口でいうと自分がされて嫌なことを人にしないこと、であるという。そこで、
青木社長は問う。
「次に平和について見ていきたいのですが、幸之助さんが残した言葉には『平和』に

関する直接的な文言が少ないように思います。これは何か理由がありますか。」
佐藤専務は答えた。
「幸之助は昭和二年二月、PHP研究所を創設してPHP活動を開始しました。PHPとは「peace and Happiness through prosperity」の頭文字で、物心両面の繁栄によって平和と幸福をもたらそう」という意味です。万物の霊長である人間には原則として繁栄、平和、幸福が与えられているはずだ、というのが幸之助の考え方で、PHPはその考えに基づいて命名されています。

この三つの言葉に関しては、幸之助の言葉として、『繁栄の基』とか、『平和の意義』とか、『幸福の意義』といったものはあるのですが、おっしゃるようには一番少ないのが平和に関する言葉です。幸之助にとつて平和はむしろもう自明のこととして、あえていわなかったのかもしれない。

ただ、静的平和ではなく

く、動的平和を、あるいは死的平和ではなく、活和平和を、といったことはいっています。何もなくて静かな平和ではなく、生成発展、日々新たに活性化されたダイナミックな状態の平和がいいということですよ。」

青木社長

「たとえば戦争について何かおっしゃっていることはありますか。」

佐藤専務

「PHPを始めたのが、敗戦で日本が灰燼に帰して悲惨な状態にあったときですから、そういった戦争はなさなければいけないということと、PHPのpeaceが出てきたのだと思います。ただ戦争そのものについてはそれほど言及していません。」

青木社長

「松下電器は戦争中、戦争に協力したとみなされ、GHQからさまざまな制限を受けています。それに対してどう思われていたのでしょうか。」

佐藤専務

「戦争中は国に協力を求め

られれば、拒否できる状況ではありません。松下電器は家電メーカーですから、本当は民生用の業者です。それなのに、軍から船をつくらせてくれとか、飛行機をつくらせてくれといわれた。当然松下の守備範囲外で、幸之助は何度も断ったのですが、軍からの圧力もあって、やむなく船を五六隻つくりました。飛行機も三機つくって、機体はベニヤ板だったそうですが、何とか飛ばすことに成功します。東大阪の方に滑走路をつくって、セメントもありませんから、しつこいので固めたりして、非常に苦労したといえます。」

しかもお金は後から支払われるという約束で、船も飛行機も全部自腹で製造しているんですよ。戦前は二〇〇〇万円（現在の価値で一〇〇億円弱）の個人資産があったのに、戦後には七〇〇万円（現在の三〇億円）のマイナスになった。そこまでしたのに、結局、お金は支払われず、GHQからはならまれて、七つの制限を受ける

ことになったのです。さて、七つの制限とは、

戦後GHQが課した幸之助と松下電器に対する指令のことで、左記の通り

- ① 制限会社の指定
- ② 財閥家族の指定
- ③ 八工場が賠償工場の指定

- ④ 軍需補償の打ち切り、特別経理会社の指定
- ⑤ 公職追放の指定
- ⑥ 持ち株会社の指定
- ⑦ 集中排除法の適用

これにより松下電器は生産活動が事実上ストップし、戦後数年間は苦難の時を送る。

青木社長

「企業活動は一切できなくなりですね。それでも国を恨むことはなかったのでしょうか。」

佐藤専務

「国を恨むよりも幸之助は自分自身を反省しています。本当に国からの要請を断れなかったのか。心の片隅に、『俺がやらなきゃ誰がやるんだ』という血気にはやった気持ちがあったのではないかと。

と。

戦後は辛酸をなめる形になって、かなりやけ酒を飲んだということを幸之助の一人娘の幸子さまからうかがいました。毎晩ジヨ三黒が一本あいてしまうので、むめの奥さまが心配して、アルコール度数の低い日本酒に替えたとのことですよ。」

青木社長

「松下電器を取り巻く状況が劇的に変化したわけですが、そのせいにするのではなく、自分の本来あるべき姿からはずれてしまった、と幸之助さんは反省したわけですね。」

佐藤専務

「たしかに自分の姿勢については反省しました。でも一方で、経営判断をややまったわけではない、ともいっています。どんなに経営者が正しく判断して正しい経営をしても、国の政治がおかしくなったら、企業の努力は水泡に帰してしまふ。だから戦後は片手に経営、片手に政治というつもりで、政治はどうあるべきかという

ことを、経営者もほとんど発言していかなければいけない、と強く思うようになりました。」

つまり政治をよくしたいということが、PHP活動を始めた理由の一つだったので。もう一つは、万物の霊長といわれている人間がなぜこんなに悲惨な目に合うのかという憤りもありました。人間には原則として繁栄、平和、幸福が与えられているはずだ。それなのにそうならないのは、お互い人間が正しい生き方、考え方をしていないからではないかと考えたわけです。」

そして自分は二介の電気屋の経営者に過ぎないが、たくさんの知恵、すなわち衆知を集めていけば、繁栄、平和、幸福に通じる道を見つけ出せるに違いないと考えました。それを実現するためにPHP研究所を創設し、世と人の繁栄、平和、幸福実現への道を模索する本格的な活動に入るわけです。」

(つづく)